010

令和７年度

熊本大学文学部入学試験問題（後期日程）

小　論　文

試験時間　１２０分

（文学科）

注意事項

１．試験開始の合図があるまで，開いてはいけません。

２．各解答用紙に受験番号を必ず記入してください。

３．問題用紙が６枚，解答用紙が４枚，下書き用紙が２枚あります。
試験開始後，落丁・乱丁及び印刷の不鮮明な箇所などがあれば，
手を挙げて監督者に知らせてください。

４．解答は，必ず解答用紙の指定された場所に記入してください。

５．解答用紙は持ち帰ってはいけません。

６．試験終了後，問題用紙と下書き用紙は持ち帰ってください。

1　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「リンゴ」という言葉は、あの甘酸っぱくて赤い果物のことを指す。「痛み」という言葉は、身体に感じるあの感覚のことを指す。しかし、もちろん「リンゴ」は本物のリンゴそのものではないし、「痛み」は本物の痛みそのものではない。だから、言葉とはそれが指し示す対象の影ないしは模造品のようなものだ。しかも、不完全な模造品だ。――古来、多くの人がそういう思いを抱いてきた。

「リンゴ」という言葉は、リンゴ独特のあの風味も、その微妙な色合いも、そして、個々のリンゴの繊細な差異も、すべて曖昧にし、乱暴にまとめてしまう。同様に、「痛み」という言葉は、個々の痛みの内実も違いもすべて平板に塗りつぶしてしまう。世界に存在する個々の物事を「リンゴ」や「痛み」といった言葉に置き換えて抽象化してしまうと、そこでは多くの重要な具体性が捨て去られ、見失われることになる。世界を余すところなく表現するには、言葉はあまりに解像度が低く、粗雑すぎる。――そのように思えるのだ。

あるとき、私はお腹に強い痛みを感じて、「痛い！」と口に出す。側にいた友達が、心配そうに「大丈夫？」と声をかけてくれる。しかし、当たり前だが、「痛い！」という言葉は痛みそのものではない。私がどんな痛みをどれほど感じているのか、あるいは、そもそも痛みを感じているのかどうか、友達は正確には分からないだろう。また、逆に、友達が「痛い！」と言っても、私には、それが本当のところどのような痛みなのか分からない。友達が「うれしい」と言っても、どんなふうにうれしいのか、どれほどうれしいのか、あるいは、そもそも本当にうれしいのかどうか、私には分からない。

こうしたもどかしい思いは、本物の影ないし模造品として言葉を捉える見方を強める。つまり言葉は、世界のなかにその一部として存在するわけではない――私と世界のあいだに、世界の影（模造品）として存在する奇妙な何かにすぎない――というわけだ。繊細で鮮烈な本物と、それを表す言葉とを比較すればするほど、言葉がそれ自体としては抽象的で、間接的で、空疎な影のように思えてくるのである。

もしも、言葉がそのような、本物を不正確にしか表現できない影ないし模造品であるのならば、それを用いたコミュニケーションはどうしても粗雑で不完全なものになってしまわないだろうか。

本当に模造品に過ぎないのかどうかはともかくとして、言葉が誤解されやすいのは確かだ。たとえば、誰かと一緒にケーキを食べているときに、とても美味しいことに驚いて、

「このケーキやばい！」と叫んだとしよう。しかし、それを聞いた相手は、このケーキはとんでもなく不味いとか、傷んでいるなどと誤解するかもしれない。

また、「このケーキ、あんまり甘くないね」という言葉も、良い意味で言ったはずが、相手には、甘みが足りないと批判しているように聞こえるかもしれない。こうした理解の食い違いは、短い文字や記号でやりとりをするＬＩＮＥなどのＳＮＳでも――あるいは、この種のコミュニケーションにおいては特に――よく生じていると言える。

また、現在のＳＮＳ空間は、個人の言葉が瞬時に拡散するために、言葉を発した当人が想定していなかった大きな影響を社会に与えてしまうケースが跡を絶たない。たとえばある人が、あるお店の店員の態度に気分を害し、そのお店に対する抗議をＳＮＳに投稿したとしよう。すると、その言葉がたくさん「リポスト（リツイート）」「シェア」「いいね」などをされて拡散し、そのお店に思いがけず非難が殺到したり、逆に、そのお店を支持する人々からの反論や非難が投稿者のほうに押し寄せたりすることがある。たとえ抗議の内容が事実に基づいているとしても、また、非難自体は理不尽なものでないとしても、勢いが度を超してひろがり、言葉を発した当人がその拡大を制御できないという事態がしばしば生じているのである。

だとすれば、こうしたコミュニケーション上の事故や制御不能な状態が発生しないように、言葉を用いるときには常に事細かに説明を尽くすべきだろうか。しかし、たとえば、「このケーキは今年食べたもののなかで最もよくできている」と言ったとしても、「このケーキやばい！」という叫びほどには驚きや感動は伝わらない。また、「このケーキ、あんまり甘くないね。で、この「甘くない」というのは今はネガティブな意味で言っているわけではなくて、むしろポジティブな意味で言っているんだよ」などと長い補足をいちいち加えていては、聞いている相手を退屈させたりうんざりさせたりすることになる。要は、そのような説明は面倒でつまらないのだ。

一般的に言って、くどくどと長く言葉を連ねることが、自分の思いや事実などを正確に伝えられることにつながるとは限らない。ケーキの味や香りや口当たりを完全なかたちで言い表すことは、どれほど凝った言葉を積み重ねたとしても不可能だし、海と空が融け合う色合いの美しさは、どれほど言葉を付け加えたとしても再現できるものではない。説明しすぎることは、聞き手を飽きさせ、言葉を野暮で余計なものにしてしまう。

また、丁寧すぎる長い言葉は、親密な関係やくだけた場にふさわしくない仰々しいものになりがちだし、時間がかかるため効率が悪く、そして面倒だ。それから、個々の言葉に

対する捉え方の違いや、語彙力の違いなどによって、言葉を積み重ねれば積み重ねるほど互いの言っていることが分からなくなってしまう、ということもある。つまり、簡潔な言葉では不足なら、詳細な言葉に置き換えればよい、というわけではないのだ。

このように、言葉には、不正確さや不完全さ、曖昧さや不確かさ、つまらなさや退屈さといったものを帯びるおそれがつきまとう。しかし、それでも、言葉は私たちの生活に欠かせないものだ。

たとえばお腹が痛いとき、あるいは、誰かに何かをしてもらってうれしいとき、「痛い」や「うれしい」といった言葉を発することなしに、そのことを他人に分かってもらうのは簡単ではない。また、家の近所に新しいケーキ屋ができたという事実を、「家の近所に新しいケーキ屋ができたよ」といった言葉を用いずに他人に知らせることは困難だ。

しかも言葉は、いったん覚えてしまえば、どんな所にも、いわば手ぶらで簡単に持ち運べる。ケーキそのものをずっと持っているわけにはいかないが、「ケーキ」という言葉であれば、学校でも富士山の頂上でも、いつでも取り出して相手に差し出すことができる。

さらに、言葉は現実を超えた物事を表現することもできる。本当は痛くないのに「お腹が痛い」と言って学校をサボることもできるし、「家の近所に隕石(いんせき)が落ちたよ」と嘘(うそ)を言って友達をからかうこともできる。もっとも、それらの言葉を自分が制御できるなら――つまり、自分の思う通りの効果を発揮して、相手を都合よく操ることができるなら――の話だが。

私たちは生活のあらゆる場面で言葉を用いており、言葉なしには生きることはほとんど不可能とも言える。しかし、まさにその言葉によって、しばしば生活にトラブルがもたらされる。言葉によるコミュニケーションは、どうにも不正確で不完全なものであるように思える。すなわち、言葉を通して他者と理解し合おうとすると、そこには誤解や無理解の余地、あるいは、想定しなかった影響を生み出す余地が、どうしても生まれてしまうように思われるのだ。

はたして言葉とは、私と私以外の人々とをつないでくれる「媒介物(メディア)」なのだろうか。それとも、両者を隔てる「障壁(バリア)」なのだろうか。私たちの可能性を広げてくれる希望なのだろうか、それとも、私たちを縛ったり振り回したりする制御不能な厄介者なのだろうか。そのどちらでもあるのだろうか。あるいは、どちらでもないのだろうか。

（古田徹也『言葉なんていらない？　私と世界のあいだ』による。原文を改めた箇所がある。）

（問１）　傍線部はどういうことか。本文の内容を踏まえて、わかりやすく説明しなさい。（二〇〇字以内）

（問２）　二重傍線部について、筆者の考えをまとめた上で、それに対するあなた自身の考えを述べなさい。（四〇〇字以内）

2 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

Socrates proclaimed that "the unexamined life is not worth living for a human being." In a democracy fond of impassioned(1) rhetoric and skeptical(2) of argument, he lost his life for his allegiance(3) to this ideal of critical questioning. Today his example is central to the theory and practice of liberal education in the Western tradition, and related ideas have been central to ideas of liberal education in India and other non-Western cultures. One of the reasons people have insisted on giving all undergraduates a set of courses in philosophy and other subjects in the humanities(4) is that they believe such courses, through both content and pedagogy(5), will stimulate students to think and argue for themselves, rather than defer(6) to tradition and authority—and they believe that the ability to argue in this Socratic way is, as Socrates proclaimed, valuable for democracy.

The Socratic ideal, however, is under severe strain in a world bent on maximizing economic growth. The ability to think and argue for oneself looks to many people like something dispensable if what we want are marketable outputs of a quantifiable(7) nature. Furthermore, it is difficult to measure Socratic ability through standardized tests. Only a much more nuanced qualitative assessment of classroom interactions and student writing could tell us to what extent students have learned skills of critical argument. To the extent that standardized tests become the norm by which schools are measured, then, Socratic aspects of both curriculum and pedagogy are likely to be left behind. The economic growth culture has a fondness for standardized tests, and an impatience with pedagogy and content that are not easily assessed in this way. To the extent that personal or national wealth is the focus of the curriculum, Socratic abilities are likely to be underdeveloped.

Why does this matter? Think about the Athenian democracy in which Socrates grew up. In many respects its institutions were admirable, offering all citizens the chance to debate issues of public importance and insisting on citizen participation both in voting and in the jury system. Indeed, Athens went much further toward direct democracy than any modern society in that all major offices, apart from the commander of the army, were filled by lottery(8). Even though participation in the Assembly was to some extent limited by labor and residence, with urban and leisured citizens playing a disproportionate(9) role—not to mention the exclusion of noncitizens, such as women, slaves, and foreigners—it was still possible for a non-elite male to join in and offer something to the public debate. Why did Socrates think that this thriving democracy was a sluggish(10) horse that needed to be stung into greater wakefulness by the skills of argument that he purveyed(11)?

(Martha C. Nussbaum, *Not for Profit. Why Democracy Needs the Humanities*)

注

(1) impassioned：情熱的な

(2) skeptical：懐疑的な

(3) allegiance：忠誠，献身

(4) humanities：人文科学

(5) pedagogy：教育，教育法

(6) defer：従う

(7) quantifiable：定量化可能な

(8) lottery：くじ，抽選

(9) disproportionate：不釣合いな，バランスを欠いた

(10) sluggish：のろい，鈍い

(11) purvey：伝える，提供する

(問１) 下線部について，それが歴史的にどのようなもので，現在どのような状況に置かれていると著者は考えているか，日本語で要約しなさい。(200 字以内)

(問２) 著者の主張するソクラテス的能力 (Socratic abilities) が，文学や文化に関する研究に対して持つ意義について，あなたの考えを日本語で述べなさい。(400 字以内)